

# ESD の視点に立った中学校家庭科の授業実践研究

## ～ 仮設住宅を通して考える ～

吉 岡 良 江\*

本研究は、中学校技術・家庭科＜家庭分野＞において、東日本大震災を経験された方々の暮らし、その中でも特に仮設住宅に注目し、ESD の視点に立った授業実践の一端を報告するとともに、授業後に生徒が書き綴った振り返りシートからその学習効果を図ることにより、ESD の視点に立った教科指導を推進していくための方策を見出すことを目的に取り組んだものである。

具体的には、岩手県沿岸部を中心とした被災地への視察や三重さきもり塾での聴講、大学教員をはじめとする専門的見地からの指導・助言を基にした教材研究と、その上で行った全5時間の授業実践である。授業の終わりに振り返りシートを配付し、記述後回収した。

そこに記された文言からは、教科のねらい及び ESD のねらいであるコミュニケーション力やつながりを尊重する態度の育成等については、概ね成果が認められた。本研究において特に重視した主体的に実践する力や他者と協働する力の伸長については、その成果を認めるには至らないということが明らかとなった。

キーワード：ESD、東日本大震災、仮設住宅、主体的実践力、協働力

## I はじめに

現行の学習指導要領にみるように、中学校家庭科の指導においては、少子高齢化への対策や食育の推進等と併せて、持続可能な社会の構築等社会の変化に対応する力の育成が重要視されている。国立教育政策研究所による「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究（最終報告書）」にも、既存の教科等に組み込むなどして、教育活動全体を通して社会の変化に対応する力の育成をめざす授業を展開することの必要性が記されている。

本年度は「国連持続可能な発展のための教育（ESD）の10年」の最終年であり、近年における ESD 推進に向けた取組の成果をはかる時期を迎える。しかし、教育現場における ESD の定着には学校間格差が非常に大きく、今後のさらなる推進には、まず何よりも教師一人ひとりが ESD のねらいについて共通認識を図るとともに、担当教科等の指導を通してその具現化に努めることが必須である。

このような状況の中、筆者が担当する中学校家庭科では、「東日本大震災を経験された方々から学ぶ」をテーマに、持続可能な社会の構築に資する力の育成をも鑑みた授業実践を進めてきている。

今年は震災からはや4年目を迎える。依然として復興には時間を要する状況にあるが、多くの人々の尊いのちと引き替えに、私たちはあらためて人と人とのつなが

りの大切さや、将来を見据えた上で自分の暮らしを見つめ直すことの大切さに気づき始めるようになった。多くのいのちが失われた未曾有の出来事であるこの震災を教訓として、これからの生き方について学ぶことは、私たちにとっての義務だと痛感する。

本研究は、東日本大震災を経験された方々の暮らし、その中でも特に仮設住宅に注目し、ESD の視点に立った中学校家庭科の実践の一端を報告するとともに、授業後に生徒が書き綴った振り返りシートからその学習効果を図ることにより、ESD の視点に立った教科指導を推進していくための方策を見出すことを目的とする。

## II 研究の概要

### 1 研究の対象と調査時期

M 大学教育学部附属中学校3年生140名を対象とする。4クラスからなる学年集団である。実施時期は、平成25年9月から平成26年2月にかけてである。卒業が目前に迫り、中学校家庭科で学ぶべき各領域の履修内容もほぼ終了した時期にあたる。

### 2 ESD の視点に立った教科指導について

ここではまず、「ESD の視点に立った教科指導」とはどのようなものなのか、明らかにしたい。

技術・家庭科＜家庭分野＞の目標は、次のように示されている。

#### ＜家庭分野の目標＞

衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術

\* 三重大大学教育学部附属中学校

を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。

これを受けて、筆者は、教科の学びを通して、以下のような力の育成をめざし、取組を進めている。

- ・生活を自立的に営む力
- ・暮らしの中の課題を見出す力
- ・その改善・解決に向けて主体的に取り組む力
- ・生活の主体者として社会に働きかける自覚と実践力
- ・家族や他の人々と共生する力

また、このねらいを実現させるためには、日々の授業において「教科の本質に迫る探究の学び」を構築することが重要であると考えている。日々の生活そのものが学びの対象である本教科においては、日常生活の中に実在する生活課題を学習課題とすること、また、課題解決のためには多様な価値観の共有が必須となることを踏まえ、仲間とともに自他の考えを聴きあい学び合うことが重要なポイントになるととらえている。

一方、ESD については、持続可能な社会をつくるための構成概念として、[多様性・相互性・有限性・公平性・連携性・責任性]等を挙げている。また、ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度として、[批判的に考える力・未来像を予測して計画を立てる力・多面的総合的に考える力・コミュニケーションを行う力・他者と協力する態度・つながりを尊重する態度・進んで参加する態度]等を挙げており、教科のねらいと共通する部分は多い。

ESD の視点に立った教科指導について、小野他(2014)<sup>1)</sup>は、ESD では、社会的・文化的・環境的等の多面的な視点を踏まえた教育を行っていること、一方家庭科では、自分たちの生活スタイルの創造が目標であり、生活課題から解決方法を考え行動する力の育成をめざしていることを踏まえ、「貧困・ジェンダー・ワークライフバランスなどの多面的な視点を持ってその関連性を考慮し、身の回りの生活課題から社会とのつながりを見つけて解決方法を考え、自分の生活の中で実践に結びつけることができる学び」を、家庭科で行う ESD に求めている。

また、妹尾(2013)<sup>2)</sup>は、「生活の質の向上」をめざし「主体的な生活者を育てる」ことが家庭科のねらいであり、多様な学習形態を取り入れながら課題解決的な学習が行われているのに対し、ESD は「参加・体験型の手法」「課題解決型」「多様な人々との学び合い」「学習者の主体性を尊重する」など、学びのスタイルの見直しという視点もあわせもっていることから、「家庭科は教科の学びそのものが ESD となる可能性を持っていると考えることができる」と述べている。

これを受けて、本研究においては、これまでの実践と同様に日常生活の中に実在する生活課題の中から学習課題を設定し、「教科の本質に迫る探究の学び」の展開に

努める。その上で、教科としてのねらいに迫りつつ、持続可能性についての思考を深めることも可能とする学びを「ESD の視点に立った教科指導」としたい。

東日本大震災を経験された方々の暮らし、その中でも特に仮設住宅に注目した本実践における教科のねらい、そして ESD としてのねらいを次に紹介する。

#### <教科としてのねらい>

「C 衣生活・住生活と自立」の(2)「住居の機能と住まい方」の A・イ、及び「身近な消費生活と環境」の(2)「家庭生活と環境」の A との関連を図りながら、

○仮設住宅の住まいとしての役割について意欲的に考えることができる。【関心・意欲 態度】

○今後の災害時を想定して、被害を未然に防ぐために、また被害を最小限に食い止めるために、必要なこと・自分たちにできることを提案することができる。【創意・工夫、技能、知識・理解】

○災害時を想定して、仮設住宅で生活する際の基礎的な知識をリスクマネジメントの視点で身に付ける。【知識・理解】

○実際に仮設住宅での生活を経験された方々の声を基にして、いかなる場合であっても安全・安心な暮らしの実現のために、地域の人々の連携・コミュニティが重要であることを理解する。【知識・理解】

#### <ESD としてのねらい>

○リスクマネジメント(防災・減災)の視点で、これからの暮らしを考えることにより、短期的には不利益を被っても、長期的にみて、持続可能な政策に参加・参画できる態度を育成する。

○さまざまな問題解決のために多様な他者と話し合える力及びよりよい解決策を探る態度を育成する。

○さまざまな問題解決のために仲間をはじめとする他者の多様な考えを聴き、自己の考えや価値観をより豊かなものにすることができる。

### 3 授業効果の測定

上記 2 を踏まえて、本研究においては、特に「主体的に実践する力」「他者と協働する力」に注目し、一連の学びを通じた変容のありようを、授業後に記す振り返りシートへの記述内容よりはかるものとする。

### 4 授業づくりのためのてだて

本実践を行うにあたり、授業づくりのためのてだてとして、次のような活動を行った。次にその概要を報告する。

#### (1) 被災地視察

特に被害の大きかった岩手県南部の沿岸部を中心に視察を行った。主な視察地は、岩手県上閉伊郡大槌町、釜石市鶴住居町、大船渡市、陸前高田市、宮城県気仙沼市である。平成 25 年 12 月に実施した。主な活動は現地の見学と地域住民への聞き取りであった。聞き取り相手は、岩手県雫石小学校府金良夫校長、岩手県釜石市立白山小

学校高橋道明教諭、同釜石第一中学校高橋さかえ養護教諭、及び地域住民らであった。府金良夫先生については、震災直後から今日に至るまで、被災者支援に携わっておられる。高橋道明先生・高橋さかえ先生については、地震発生当時津波から逃れるために、勤務校の児童・生徒とともに避難した経験をもっておられる方々である。

筆者にとっては、これが震災後初の被災地への訪問であった。テレビの特別番組や雑誌等から、現地の様子は少なからず把握しているつもりでいたが、現実には予想以上に厳しいものであった。依然として復旧・復興がままならない状態にある町の姿、震災遺構として残すか否かで地域住民の意見が対立したままである崩壊した町の施設、被害の多少によりこれまでの地域コミュニティが崩壊に追い込まれた地域の話、率先避難者として被災時に大な活躍を見せた中学生の話等々、限られた時間ではあったが、さまざまな立場の方の話を聞くことができた。

仮設住宅については、さまざまなタイプの仮設住宅の見学と併せて、釜石市及び上閉伊郡内の中学校が使用している仮設校舎を訪問した。一口に仮設住宅といっても、使用している資材及び構造等の違いにより、住み心地は大きく異なることを身をもって学ぶことができた。この他、復興住宅の見学も行った。

## (2) 三重さきもり塾の聴講

三重の防災・減災の担い手を育成することをめざし、主として三重県と三重大学の連携により「美し国おこし・三重さきもり塾」が開設されている。当塾は、防災・減災活動に関して、自然科学分野や人文社会科学分野等での広範囲な知識を持ち、先進的・実践的に防災・減災のための計画の立案とそのマネジメントを行う能力、また、現場で活躍するための応用力や実践力を併せもった人材の育成をめざしている。

授業づくりのために2回聴講を行った。実施時期は平成25年10月である。主な活動はT市内の公園を防災公園や仮設市街地として活用することを想定して、グループごとにプランを立てるという取組の見学であった。実際に公園に赴いて公園及び周辺地域の様子を把握することの大切さ、また、ユニバーサルデザインの視点に立ち、誰もが安全・快適に利用できる場所として、また機能性だけでなく、避難住民やボランティアのよりよいコミュニケーションづくりへの配慮やそのためのだてを講じることの大切さについて学んだ。当塾への参加者はそれぞれ多様な立場にあり、小グループでの意見交換の場では企業サイド・行政サイド・自治体サイド等さまざまな立場の意見が寄せられた。

また、「美し国おこし・三重さきもり塾公開シンポジウム」への参加を行った。当シンポジウムは、「災害を備えたまちづくり・人づくり 三重で大災害を防ぐために～防災を担う人材“さきもり”のこれまでとこれから」

と題し、平成25年11月に開催されたものである。三重県における今後の防災にかかわる人材の育成・活用についての鈴木英敬三重県知事と内田淳正三重大学学長、美し国おこし・三重さきもり塾畑中重光塾長による鼎談をはじめ、防災を担う人づくりの意義と展望についての講演及びパネルディスカッションが行われた。

## (3) 大学教員の指導助言

本実践を行うにあたり、三重大学教育学部家政教育講座吉本敏子先生の指導助言を得た。教科の本質に迫る探究の学びを構築するにあたって、またESDとしてのねらいをも実現可能とする教科指導のあり方について等、非常に数多くの示唆を得た。

## (4) 学生の支援

教育学部家政教育コースで学ぶ4年生の学生2名の支援を得た。履修科目（教職実践演習）の課題の一つとして位置づけたものである。

具体的には、東日本大震災に際し、仮設住宅での生活を余儀なくされた人々の暮らしに関する各種データ資料の収集、古くから伝わる東北地方のすまいの特徴についての資料収集である。この内の1名については、三重さきもり塾への聴講も筆者とともに行った。

## (5) 三重における津波被害の記録を基にして

### ～鳥羽市内に現存する碑の見学～

津波被害に注目すると、かつて三重県でも多数の被害者が出た地域がある。鳥羽市浦村町では安政の大津波（1854年）により、集落がほぼ全域津波にのまれた。そのときの津波の大きさを今日に伝える今浦錦照山大江寺の前に残る大津波潮先棒杭と、明応地震（1498年）の後、集落ごと移転したために、約22.5メートルの津波が押し寄せたにもかかわらず、被害者を最小限に留めることができた同市国崎町を見学した。

## (6) 人と防災未来センターへの見学

阪神・淡路大震災を機に作られた施設であり、例年本校2年生が1学期に実施する社会見学で訪問する施設である。筆者も度々引率で訪問しているが、あらためて見学を行った。平成25年12月末の訪問であった。特別企画として上映されていた東日本大震災を取り上げたドキュメンタリー映画の視聴も行った。

## 5 授業の実際

題材名を「東日本大震災を経験された方々から学ぶ～仮設住宅を通して考える私たちのこれからの暮らし～」とし、全5時間の指導を行った。

### (1) 第1時 仮設住宅って何？

「仮設住宅」について知っている（知っていると思っている）こと、知らない（知らないと思っていること）を、クラスで共有した。プレハブ製箱形の白い建物というイメージに固着している生徒、電気やガス、水道はどうやって使用可能にするのか等素朴な疑問を抱く生徒、



仲間と意見を交わし合う中で、自分が知っていると思っていたことが必ずしも正しい情報ではないことに気づく生徒がみられた。大半の生徒にとって仮設住宅はテレビや新聞で目にする存在である。知っているようで知らないことも多々あるということに気づくことができた。今後に備え、仮設住宅についての基礎的な知識を確実に身につけておきたいと考える生徒も多数みられた。

なお、いずれのクラスにも数名、家族をはじめとする身近な人々が、仕事やボランティアで、現地に赴く等被災地とかかわりを持つ状況であった。

## (2) 第2時 仮設住宅と住まいの役割

「住生活と自立」領域は第2学年での既習事項となる。ここでは住まいについて学んだ知識を基にして、仮設住宅の住まいとしての役割について考えること、また、仮設住宅に関するデータや資料を読み取ることで、被災地における仮設住宅での暮らしについての理解を深めることをねらいとした。

仮設住宅は住まいとしての役割を担っているか否かグループ毎に立場を定め、ディベート形式で学び合う場を設けた。住まいの基本的な役割（①生命と生活を守る場②休養と安らぎを与える場③子どもと家族が成長し合う場）について確認した上で、被災地の人々の震災前の住まい（東北地方の一般的な住まい）を紹介し、さまざまな観点で仮設住宅と比較した。

その結果、仮設住宅は①「生命と生活を守る場」として、住まいの役割を担う存在であるが、②「休養と安らぎを与える場」③「子どもと家族が成長し合う場」としての役割を担うものか否かは、仮設住宅と何を比較するかによって異なり、復興に向けて明日への希望を見出す場としての役割を担う存在になるということを確認するに至った。

## (3) 第3時 仮設住宅に住む

自分たちが住む三重の地で災害が生じた場合、自分たちの生活はどうなるのか。一般的な仮設住宅の間取り図を用いてどのように住まうか等検討した。そこでいかに考え行動することが重要かということについては、三重さきもり塾で学んだことを基にした。

決して他人事ではないという意識の高まりから、本授業に臨むことに抵抗感を感じる生徒もみられた。

## (4) 震災学習講演会（その1）の開催

震災以降、被災者の復興を願い、さまざまな形で支援活動を行っている岩手県雫石町立雫石小学校長の府金良夫先生を招いての講演会を、全校生徒を対象に実施した。開催は平成26年2月である。内容は、災害時における危機管理の重要性を説くだけでなく、「これからの生き方」について考える内容のものであった。「津波でんでんこ、命でんでんこ」という岩手県の沿岸部に伝わる言い習わしに象徴される率先避難者としての活躍のおかげで、多くの地域住民のいのちを救う結果となった釜石東

中学校の話、今後の災害を想定して、学力・体力をつけておくことの大切さについて等多岐に渡る内容であった。

なお本時は総合的な学習の時間に位置づけた。

## (5) 第4時 震災学習講演会（その2）の開催

「仮設住宅を通して考える 私たちのこれからの暮らし」と題し、3年生を対象とした講演会を実施した。実施日は、平成26年2月10日である。講師は、(4)と同様雫石町立雫石小学校長 府金良夫先生である。内容は、仮設住宅に焦点をあてて被災地の現状を学ぶとともに、自分たちのこれからの暮らしについて考えることをねらいにしたものであった。大半の生徒にとっては、イメージや授業を通して学んだ「仮設住宅での暮らし」でしかなかったために、実際のありようを知る初の機会となった。具体的には、第3時までの取組を通して疑問に思ったこと（仮設住宅での実際の暮らしについて・最後まで仮設住宅に残った高齢者への対応について・一軒あたりの建築費について等）についての回答を得たり、今後三重における防災活動の担い手として、自分たちがとるべき行動についての説明であった。

仮設住宅の住まいとしての役割は、そこで生活する時間の経過に伴って変化すること、プライバシーを守ることに加えて、よりよいコミュニティを形成することも、心身の健康を保持するために大切であるといった話は、これまでの取組からは得ることのできないものであった。

## (6) 第5時 災害時を想定してできることを考えよう

本題材におけるまとめの時間である。一連の学びを振り返って、個々に考えたこと、さらに知りたいと考えたことをまとめる場とした。時間の都合上個々の考えを共有するには至らなかった。振り返りシートへの記述内容は次のとおりである。

### <仮設住宅及び住まいについて>

- ・仮設住宅は自分の中ではもう少し住みやすいと思っていたが、実際の様子を聴くことで今まで知らなかった色々な不便があることがわかった。新しく造られたものと古いものでは、仮設住宅の暖かさや音漏れなど、さまざまな違いが出てくることを知った。仮設住宅の暮らしの様子を聞いて、「必要最低限のものしか持たない」ということの大切さを強く感じた。
- ・まだ仮設住宅で暮らしている人がたくさんいるのかと思っていたが、仕事も安定していて、新しい生活を始めている人もいることに驚いた。
- ・府金先生が、仕事を失ったお年寄りの人々は、無料である仮設住宅に暮らすしかないけれど、仮設住宅もそのうち撤去されるというようなことをおっしゃっていた。そのお年寄りの方々の今後は、きっと苦しい生活が待っているだろう。国はそんな人たちにしっかり対応してくれるだろうかと思った。
- ・仮設住宅は大きな災害が起きたときに、どれくらいな

ら耐えられるのか。

- ・家屋の復旧状況についても知りたい。
- ・正しい情報を理解するメディアリテラシーが大切だと思った。
- ・府金先生は、はじめに海が好きだとおっしゃっておられたが、自分はその時たくさんの人を殺した海をなぜ好きでいられるのかとても不思議だった。でも最初の方で水は生きていく上で欠かせないとおっしゃっていた。水は生きるためには必ず必要である。府金先生は、海とのかかわり、自然とのかかわりが大切だということ伝えたかったのではないかなと思った。とっさの判断で生き延びた人たちがたくさんいるので、諦めず信じるのが大切だと思う。地震という自然との共生というものを改めて考え直すいい機会だったと思う。だから自分たちにできること（ボランティア）などに参加することが大切である。

#### <自分たちにできることについて：具体的なこと>

- ・他の所で震災などがあって、自分がボランティアとしてそこへ行く時は今日わかったことを生かしていきたい。
- ・防災用語を簡単にすることを手伝いたい。逃げる時の声かけは、タカダイ（高台）、ヒナン（避難）ではなく、なるべく「たかいところ」「にげる」等、外国の人にも伝わるようにする。
- ・被災地への募金や物資の運搬を行いたい。
- ・自分の身近な所で逃げるのが難しそうな人と一緒に逃げられるように話をしておきたい。
- ・備え（準備・仮設住宅等）をしておく。どんな問題が生じるのか等前もって知っておく。
- ・これまでは募金やボランティアくらいしかできることはないだろうと考えていたけど、形にならなくても、東日本大震災を忘れないということも大切なのではないかと今の講話を聴いて考えた。

#### <自分たちにできることについて：日頃の意識>

- ・人に言われてから行動するのではなく、自分のいのちは自分で守ることが最も重要だと思った。家族を心配して戻ったりせず、信じていつか会えると思うことが大切であり、まず逃げるのが重要だと感じた。
- ・色々な人の情報をしっかりと聞いて、判断していくことも大切であると感じた。
- ・日本人の持つ分け与えの精神を忘れてはならないことを、あらためて実感した。
- ・体を鍛えること、勉強をすること、諦めないことが大事だということを自分の心に留めておきたい。
- ・先生の話聴くと、とにかく大変で時間勝負であったことはわかった。しかし、私は実際にそれらを体験したわけではないので、本当はどれほど切羽詰まったものであったのかはわかることができない。それでもやはり、それまでのおこないがものを言うのだなと感じ

た。祖父母を説得させた話でも、中学生が各自で逃げていった話でも、それまでの経験がなければ、皆死んでしまっていたのだと思う。

- ・現実から目を背けないようにしようと思う。社会で今どんなことが起きているのか、それらに対応できているか、そういったことに目を背けてしまえば私たちはどうすることもできない。自ら社会の問題にぶつかり、それらを考えていくことは誰にでもできると思う。
- ・あまり外国の人々のことを考えていなかったように思う。また幼い子どもたちのことを考えてなかったように思う。
- ・仮設住宅や避難場所では小中学生が、人の役に立つためにどのようなことができるのか。
- ・自分は今しっかりと知的資源を蓄えて、数学的思考などを身につけることが大事だと思う。また避難を先立ってできる人間になるため、想定外の大津波でも山へと人を運んでけるように体を鍛える必要があると思った。
- ・「津波でんでんこ 命でんでんこ」の言葉から、僕は、他の人が生き残ることを信じ自分も生き残ることが、親しい人の想い（自分の命への想い）に応えるための方法だと思った。

## 6 結果

事後に書き綴った振り返りシートや授業の中での発言から、教科及び ESD のねらいにおける達成度について、結果及び考察を次に記す。

### (1) 教科のねらいについての達成度について

生徒は住居の基本的な機能についての理解、自然災害への備えも考慮した室内環境の整え方の工夫、安全・安心な暮らしを実現させるためには地域の人々との連携及びコミュニティが重要になるということについての理解等教科のねらいは概ね達成できていることが認められた。

### (2) ESD のねらいについての達成度について

#### ① 主体的実践力について

東日本大震災における被災地での復旧・復興に向けた取組の紹介と併せて、三重さきもり塾の取組を紹介することにより、三重の明日を担う存在として自分にできることを考え、それを行動につなげるところまでをねらいとした。その結果、さまざまな視点で自分にできること・したいと考えることを挙げることはできたが、行動につなげるには至らないということが明らかとなった。

#### ② 協働力について

多様な他者と話し合える力、他者の考えを聴き、自己の考えや価値観をより豊かなものにするといった面では、概ね達成できている。また、今後さまざまな立場にある人とかかわっていくこと、さまざまな立場にある人の想いに寄り添っていくことの大切さについても多くの生徒が気付いている。しかし①と同様に、そ

の気付きを行動につなげるところにまでは至らない状態にある。

### ③ その他

持続可能性を鑑み、リスクマネジメントの視点でこれからの暮らしを見つめるといった態度の育成については、「将来を見据えて」という視点は携えることができているものの、防災・減災を意識した明確な手だてを考えるレベルにまでは迫れていない結果となった。

## 7 まとめと今後の課題

ESD の視点に立った教科指導を推進していくための方策を見出すことを目的とし、東日本大震災を経験された方々の暮らし、その中でも特に仮設住宅に注目した中学校家庭科の授業を実践した。

その結果、教科のねらい、そして ESD のねらいとして注目した協働の力につながるコミュニケーション力やつながりを尊重する態度の育成については、概ね成果が認められた。

教科のねらいに迫ることができたことについては、日常生活の中に存在する生活課題を学習課題に設定し、教科の本質に迫る探究の学びを実現できるよう努めたことに依拠すると言えよう。

ESD のねらいとして注目した協働の力につながるコミュニケーション力やつながりを尊重する態度の育成については、他者とつながることの大切さを重視した取組を日頃から行っていることの効果と見て取ることができる。また、府金良夫先生による講演は、危機管理の重要性を説くだけのものではなく、「人としていかに生きるか」「他者と協働することの大切さ」等多岐に渡る内容であったことも影響したのではないだろうか。

一方、本研究において特に重視した主体的に実践する力や他者と協働する力の伸長については、その成果を認めるに至らないということが明らかとなった。

これについては、さまざまな視点で自分にできることや行動に移していきたいと考えるレベル、また今後さまざまな立場にある人とかわっていくことや寄り添っていくことの大切さに気づくレベルではなく、実際に行動するレベルまで期待したことに依ると思われる。では「実践力を育むためのてだて」をいかに講じるか。

そのためのてだてとして、「東日本大震災を経験された方々から学ばせていただく」授業づくりに、今後も引き続き取り組んでいきたいと考えている。

本実践においては、教科の本質に迫るために、まず確かな情報を、そして当事者でなければわからない想いや気づきをダイレクトに生徒に伝える必要があるとの考えに基づき、現地視察や現地の方の声を直に聴く場の設定、被災地に関する確かな情報の収集に努めた。

数多くの方々の支援を得ることにより、実施に踏み込

むことがきたと考えている。家庭科のねらいでありまた同時に ESD のねらいでもある「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」は、授業づくりを担う教師にとっても重要な力であると実感している。

他の領域、例えば「食生活と自立」「衣生活と自立」「身近な消費生活と環境」の切り口で、「東日本大震災を経験された方々から学ぶ」を主テーマに据えた授業を展開することによっても、ESD の視点に立った中学校家庭科の授業実践は可能であろう。今後は、それら一連の活動を通して、生徒の学びはいかに変容するか等比較検討しながら、ESD の視点に立った家庭科の授業づくりに努めたい。併せて、東日本大震災を経験された方から学ぶ場づくりについては、自らのライフワークとして、この経験を風化させないよう努めていきたい。

### <引用文献>

- 1) 小野恭子・大竹美登利. (2014). 小学校家庭科における持続可能な開発のための教育 (ESD) の授業開発. 日本家庭科教育学会誌, 57(2), 103-110.
- 2) 望月一枝・倉持清美・妹尾理子・阿部睦子・金子京子. (2013). 生活の発見 生きる力をつける学習 未来をひらく家庭科. 教育実務センター, 124-125.

### <参考文献>

- 岩佐明彦. 仮設のトリセツ. 主婦の友社. 2013.
- 大嶋泰治. 人類は今やその行動力で自滅に向かっている. 晃洋書房. 2013.
- 国際家族心理学会. 第 7 回大会 多発する危機と家族の絆プログラム・発表論文集. 2013.
- 国立教育政策研究所. 学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究最終報告書. 国立教育政策研究所. 2013.
- 大和ハウス工業株式会社. The Way of the Heart 2011. 3. 11 東日本大震災の記録. 2012.
- 田中重好・船橋晴敏・正村俊之. 東日本大震災と社会学. ミネルヴァ書房. 2013.
- 日本家族心理学会編集. 災害支援と家族再生. 金子書房. 2012.
- 日本家庭科教育学会. 第 56 回大会 研究発表要旨集. 2013.
- 日本家庭科教育学会北陸地区家庭科カリキュラム研究会. 生活主体を育む家庭科カリキュラムの理論と実践. 北陸地区家庭科カリキュラム研究会. 2003.
- 三重大学教育学部附属中学校. 研究紀要第 25 集. 2010.
- 三重大学教育学部附属中学校. 研究紀要第 26 集. 2012.
- 文部科学省. 中学校学習指導要領. 文部科学省. 2008.